

ぶらっとサロン椿通信 令和4年2月号

今号の椿:酒中花(しゅちゅうか)

R3.3.27 撮影



報告:有楽齋

毎週火曜日の午後1時過ぎから午後4時半ごろまで、朝日2丁目集会所で「健康麻雀ミーティング」をワイワイガヤガヤとやっていたのですが、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、一昨年3月10日から自粛し**現在休局中**です。

将軍が愛した江戸椿

早春に本格的に開花シーズンを迎えるツバキは日本原産の花木で、7世紀から庭木として親しまれてきた。その後、徳川二代将軍秀忠が愛し、江戸城に国中のツバキを集めたことから多彩な品種が生まれ、大衆化したといわれている。私は秀忠に端を発し、世界的なツバキブームのルーツともなった「江戸椿」の保存と再生に努めている。

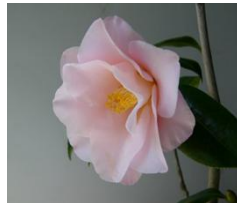
日本経済新聞 2006年掲載 日本原産の花木、保存・再生に努める 飯牟禮五郎(いむれごろう) /当時日本ツバキ協会会長) コラムより抜粋しました。(有楽齋)

秀忠の娘で、後水尾天皇の中宮として入内した和子(まさこ)は、ツバキによって大名と公家の交流を深めたという。18世紀初頭の元禄期には英国に渡り、欧州に広まった。明治以降は米国やオセアニアにも輸出され、今や世界に7、8000種もの品種が生まれている。



江戸椿研究の基盤となるのは、明治12年(1879年)に発行された「椿花集」(ちんかしゅう)だ。江戸期に駒込染井(現在の東京・駒込)辺りにいた江戸城出入りの植木職の仲間が作ったツバキのカタログで、199の園芸品種が掲載されている。日本の古典ツバキを研究する手掛かりには、宮内庁が所蔵する「椿花図譜」をはじめ、江戸期に描かれた幾つかのツバキ図譜がある。しかし古いツバキ絵に現存するツバキをただ突き合わせても、まず同定は不可能だ。それで「椿花集」が、江戸期と現代を結びつけるための重要資料となる。

代表的な江戸椿



左から
都鳥(みやこどり)
蝦夷錦(えそにしき)
酒中花(しゅちゅうか)
羽衣(はごろも)

純白の細い花弁が10枚ほど蓮の花のように開く「都鳥」。白地に紅の縦縞りが鮮やかな「蝦夷錦」。花びらの縁にうっすらとピンクが差す「酒中花」は酒でほんのりとほおを赤らめた美女のようだ。ピンクの代表花は「羽衣」

ツバキに対する美意識は、日本と海外とは違う。海外ではボタンと見まがうほどに花弁が重なる、あでやかな大輪を珍重する傾向があるが、日本人は花だけでなくツヤのある濃緑の葉の形や、木の姿の美しさも重視する。「椿花集」には「葉替之部」という項目があり、葉や木姿も分類の重要な要素としている。

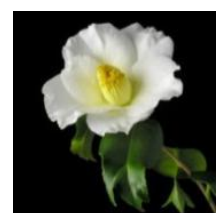
ツバキは首が落ちるように落花するするので不吉とする俗説もあるが、これは江戸幕府が、武家の間に生じたツバキブームに水を差すために流したデマゴギーとする反論も根強い。

江戸椿の先祖にあたる「原種」は、全国に広く分布する赤花の「ヤブツバキ」と、北陸の積雪地帯に咲く「ユキツバキ」、白花で九州に自生する秋咲きの「サザンカ」、そして沖縄にある小ぶりで香りのある「ヒメサザンカ」の4種。

ニュージーランド産出



ワイルド・シルク



梵天白

(ほんてんじろ)

葉の先端部で主脈が葉の下側で分離し、その先に錦魚